

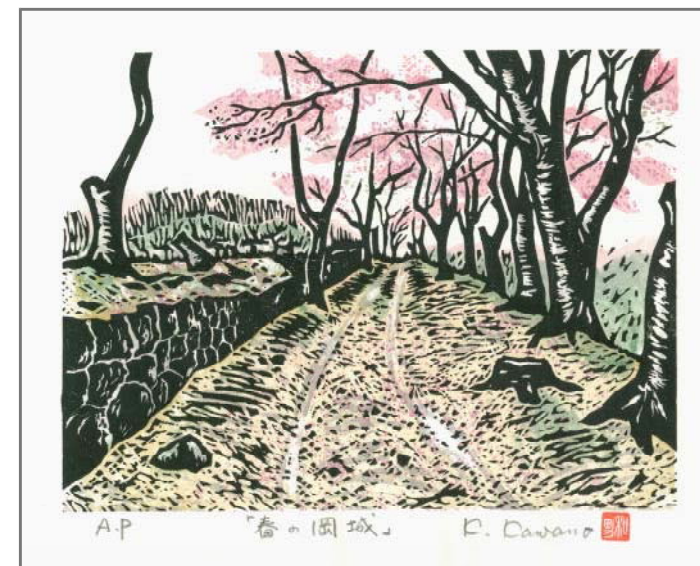
和

なごみ

## 『花に暮れて 我が家遠き 野道かな』

弥生の空に 薄墨を刷いたような夕暮れ時  
家路を急ぐ 娘子たちも居れば  
風に吹かれる ほろ酔いかげんの者も居る

花に誘われ 足を運んできたが  
さて どのあたりまで 来てしまったものやら  
二百年前 蕪村は  
提灯に火を点した頃から  
漂い始めた花の香を  
楽しみながら 帰ったことだろう



むかしの光 今何処

## 旬の版画

音楽堂へと続くみち  
人影のない この場所で  
サクラの花が  
眩しいくらいに  
咲き誇っていました

せんてい  
剪定ばさみ (庭師のワンポイントアドバイス)

## 「てんぐ(天狗)巢病」

サクラの木を注意してみると、小枝が群がり生え、こんもりした固まりが出来ているものがあります。これを“天狗の巢”と呼んだところからこの名がつけました。原因は、カビ(糸状菌)によるもの、ウイルスによるもの、遺伝的な突然変異によるものなど様々ですが、天狗巢が出来た枝は花が咲かず、放っておくと樹が枯れてしまいます。

防除方法は、病枝を切除し、切除した後に防菌剤(専門の薬店で)又は癒合促進剤(ホームセンターにもあります)などの塗布を行って下さい。

たくさん発病している樹では、少なくとも3年は続ける必要があります。

天狗巢病のサクラ  
○で囲んだ部分が天狗巢

## 一建落着



H邸(倉木)が完成しました。  
広い敷地を活かした  
ご主人こだわりの“平屋造り”です。



最新機能満載のキッチン  
と明るいダイニング

カウンターには、  
ご主人のお父様が  
大切に保管していた  
サクラの無垢材を  
使いました。

H邸(倉木 竹田)



旧宅から移された思い出の大黒柱  
文化財を数多く手掛けた職人が  
補修を施しました。



暖かみのある杉材を  
ふんだんに使った室内

広い廊下にも  
“明かり取り”からの陽光が  
満ちています。

殿町にある旧家の塀と門が  
竹田市の『街なみ環境整備事業』  
で蘇りました。

T家(殿町 竹田)



発行人 川野和男  
編集 川野組内  
家造り匠の会

5 0974-62-2416

✉ tkk22@theia.ocn.ne.jp

🌐 <http://www6.ocn.ne.jp/~k-kawano>

## ちょっと機になるお話 新幹線

久しぶりの汽車の旅。小倉駅も十数年ぶりだ。

2月のホームはまだ風が冷たい。乗り継ぎの上り新幹線「のぞみ」の到着にはまだ時間がある。寒さから逃れようと誰も居ないホームの待合室に入った。間もなくすると年配の女性と小さい男の子が入ってきた。お祖母ちゃんと孫だろうか。男の子は、たった今動き出した下りの新幹線を指差しながらお祖母ちゃんに話し掛けていた。

「あれは、N700系だよ。・・・が700系とは違うよ。」

どうやら新幹線車両の説明をしたらしいのだが、どこがどう違っていたのか、肝心なところを聞き逃してしまった。その後も男の子は、「〇〇系は・・・が・・・だよ。」などとお祖母ちゃんに説明を続けた。

《今度は聞き逃すまい》と必死に聞き耳を立てるがお手上げだ。とてもついて行けない。幼稚園にも行ってない様な子がたいした知識だ。近頃は、鉄道マニアを『鉄ちゃん』『鉄男』『鉄子』などと呼ぶそうだが、彼もその予備軍。いや、既に一人前の『鉄ちゃん』か。新幹線の魅力恐るべしだ。



私の子供の頃は、新幹線を〇〇系などと呼びはしなかった。車両は航空機を思わせる丸みのあるノーズと、青・白のカラーリングの一種類。各駅停車の「こだま」と、主要駅しか停まらない「ひかり」。これだけ覚えておけば良かった。その、我々に一番なじみがある新幹線「ひかり号」は、今は「0系」というそう。そういう呼び方をするようになったのは、東北・上越新幹線用の200系（緑のラインのやつです）が落成した1980年頃からのことだが、残念ながら「0系」も今年の11月30日を最後に姿を消してしまった。

今日、最も新しい新幹線が、先ほど彼が言っていた「N700系」だ。しかし、0系がN700系になっても先頭車両のノーズの微妙な曲線を作り出すのには、金槌で金属板を叩き加工する『鍛金』という日本古来の技術が使われていると聞くから驚きだ。それは、「0系」の頃から変わっていないそう。最先端のテクノロジーと伝統工芸の融合が生み出す新幹線車両。あらゆるものを吸収し昇華して、新しいものを生み出す日本の工業技術の凄さだと思う。

向かいの席で祖母に新幹線の解説を延々と続ける彼も、ひょっとしたら将来はその一翼を担うことになるのかも。そんなことを考えていると、列車到着を知らせるアナウンスが入り「のぞみ」がホームにすべり込んできた。指定の席に腰を下ろすと列車は動き出した。やっぱり速い。景色が飛んでいく。こんな歌があった。



ビューーン ビューーン 走る  
青い光の ちよとつきゅう じそく250キロ  
すべるようだな 走る

(『走れ超特急』 作詞者 山中 恒 作曲者 湯浅譲二)

日本の高度成長時代、人々から愛された夢の超特急「ひかり号」の歌。NHKの『お母さんと一緒』で良く歌われていた。忘れていない、結構歌えるもんだ。多分あの男の子は、知らないだろう。私が彼に教えてあげられるのはこの歌ぐらいか。と、窓の外が真っ暗に。列車は関門トンネルに入っていった。



## 休景たいむ 「いっぷく」時間の一枚



竹田、上町の吉川屋さんの屋根から観た風景です。ぽつんと見える赤い鳥居は、切支丹洞窟礼拝堂跡への入り口に立っている赤松稲荷の鳥居です。

屋根からだ普段見えないものが見えます。

## 知っ得？納得！ こんな所にこんな物

みなさん、最近、岡城に上ったことがありますか？  
私は、久しぶりに上った岡城の劇的な変貌ぶりに驚かされました。

今回紹介する『中川覚左衛門屋敷』もその一部です。中川覚左衛門は、岡藩の次席家老をしていたそうです。岡城に建物があつたことは確かだそうですが、残念ながら現在では子孫となる古田家にも間取り図しか残っていないため、現地に残っていた基礎石と照合しながら床部分だけを再現する復元形式になったそうです。



中川覚左衛門屋敷